真冬の北海道の 生活, 今昔

金子 元三

Motozo Kaneko, 北海道大学 理学部

寒い話で少しでも涼しい気分を誘うというのも私の役目の一つと思う。気温で見ると限り北海道の冬は確かに寒い。しかし、現在は本州の人たちよりは暖かな冬を過ごしているはずである。暖房器具が完備し、家屋の構造が改良されたおかげである。かつて北海道の冬の名物であった屋根から下がる巨大なつららも、最近ではめったに見られなくなってきた。家屋構造の改良で屋根から熱が逃げなくなったためである。

数十年前の家は確かに寒かった。真赤にストーブを焚いていても、火が消えると室温はどんどん下がって朝には夜具の襟元は寝息の霜で真白になる。火の気のない廊下は雑巾を掛けるはしから薄氷が張りしばらくはつるつるする。今はこのような家にはまず出合わない。もっと前はストーブさえも珍しく、庶民の暖房はもっぱら囲炉裏であった。屋根には煙抜きの穴があって熱も一緒に逃げるので、顔は薪の火で真赤になっても背中では氷のように冷たいという具合である。私の子供の頃の農村ではまだこのような家を見かけたが、現在は資料館へでも行かぬと見ることはできない。しかし、暖房のよくきいた資料館で見ていたのでは、かつての寒さの実感がわいてこない。

太平洋戦争の終末を樺太（現在のソ連領サハリン）で迎えた知人の話であるが、日本人は毎年家がかくれるほどにまわりに薪を積み上げていた。入ってきたソ連人も徴発した日本家屋をすっかり丸太で囲んでしまった。冬が過ぎてみると日本人の家から薪は消えているが、ソ連人の方は丸太のおかげでわずかの燃料で暖かな冬を過ごしていて、大量の薪を燃やしてしまう日本人の気持がわからぬといった由である。北国の湿度は低いので風通しよりも熱を逃がさないことが第一である。北方圏に住む人たちは経験からこのことを知っ

て生活に取り入れていたが、高温多湿の亜熱帯性気候に住み馴れた日本人はそこで発達した日本家屋をそのままに北海道や樺太に持ち込んだ。もちろん、北米やヨーロッパの寒地向き家屋も入るには入っても一般庶民の生活に融け込むまでには至らなかったようである。開拓100年を迎え、北海道で生まれ育った人も増えるにおよんで、北国向きの家屋にもなじむようになってきた。生活の様式を変えるのは人間にとっていかに大変かという一つの例である。

さて、寒い家に住んでいた子供の頃は下着も十分着込んでいたので、吹雪も苦にせず戸外を飛び回っていたが、近頃は少し長く戸外に出ていると非鳴をあげて家に飛び込むしまつである。いつのまにか薄着になれてしまったためである。北国の冬は天候が変わりやすい。朝晴れていても、昼頃には猛吹雪ということがある。一昔前の子供たちは苦にもせずに吹雪をついて下校していた。農村の小学校ではそんなとき農家の親たちが馬糞で子供たちを迎えにやって来て近くの子供も一緒にのせて一寸先も見えぬような吹雪の広野を帰っていったが、事故が起きたという話は聞いたことがない。近年は天気予報が発達して、朝のうちに警報が出て小学校などは休みになる。大変な難しいことだと思う反面に、北国の厳しい自然と調和して生活していくあのたくましがだんだん薄れてゆくようで淋しい。

ところで、一言も高分子に言及しないうちに紙面もなくなってしまったが、住宅や衣服それに冬のレジャー用品の数々など、現在の北国の冬の生活にとって高分子がなくてはならぬものになってしまったことはいまさらいうまでもない。

（高分子学教室・教授、専門＝高分子物理学）

カット＝雪に覆われた札幌市郊外（国際文化情報社）